

平成二十九年一月投句

【十日恵比寿神社】

スカイプで時空を解きて御慶かな

福笹のはためく風を担ぎゆく

鞆に薬付けくれ叱りつつ

勝利

贈られし石を親しく紅梅に

真理子

柄先まで青き柄杓や初手水

スケートの靴滑らかに踏み替へし

タクシーは名護屋城址へ雪しまく

恵比須社の鯛の口より初手水

お隣りは沖繩流の注連飾

節子

手から手に鶯を替へつつ願ひつつ

由紀子

ドアホーン大寒に立つ人の声

鬼やらふ大松明の揃ひ立つ

県庁のロビー行き交ふ戎笹

友の声聞こゑたやうや梅ふふむ

光子

寂しさは後につのりて寒の梅

平成二十九年二月投句

【住吉神社・節分祭】

梅一輪茶店の客の増え初め

桃の弓放つ葦の矢厄払

おみくじを禁じ花芽の梅の枝

勝利

護摩の燠残し節分法話かな

真理子

艶聞を小耳にはさみクロツカス

墨染の雲の絶え間の月冴ゆる

海峡を前にのびのび春告鳥

鬼の舞ふ本堂節分前夜祭

迷ひつつ同じ道行く春の町

節子

やうやくに一つ飛び来し福の豆

由紀子

雪しろの川を横目に細き径

三方に春呼ぶ葦矢放ちをり

雪しろや町へ列車の日も近し

梅三分出番待ちせる園児らに

光子

我が屋根の上にオリオン冴返る

平成二十九年三月投句

【那珂川町・裂田の溝】

啓蟄やマラソンの列首都に伸ぶ

青き踏む旧道観世音寺まで

沢光る早春の音ちりばめて

勝利

見下ろせる能古志賀島青き踏む

真理子

老梅の支柱の釘を新らしく

窓を突き壊し迷走春の猪

測量の杭立ててあり春の川

記紀の世の疎水を今に青き踏む

夜の庭散らかしたままうかれ猫

節子

家毎に小橋と汲ん場春の川

由紀子

里人に一段高き初桜

雛置かぬ白蓮の部屋花一輪

共に行く筑紫の野辺の初桜

野遊や川音を聞き風を聞き

光子

ふたすぢのせせらぎの音水の春

平成二十九年四月投句

【福岡城址】

煙立ちぼん菓子破裂春うらら

花の屑濠の蓮葉を縁取れり

牧渡るいななき長く春惜しむ

勝利

花吹雪多門櫓を越えゆけり

由紀子

手水鉢ふたひらなれど花筏

猫通る鯛釣草の花揺らし

春惜む小鳥も人も野にありて

花満つる城へ石垣連なりて

光子

【お休み】

節子

一時にみな咲き急ぎ庭の春

蘆わかば潮見櫓を正面に

濠の水弧を描きつつ花筏

真理子

携えし写真に語り春惜しむ

老鶯に観音様の声がして

薰風や路地の隅々吹き渡り

誕生石エメラルドとて豆の飯

勝利

防波堤上下するかに船卯浪

真理子

シオカラが縄張り決めて夏に入る

若葉風身重の母の手をとる子

早々と矢車だけを回しをり

潮風に玉巻く芭蕉荒津山

石炭のかがり火灯す祭町

節子

町名は「港」薄暑の船溜り

由紀子

ライ麦と名札立てられ麦熟るる

卯浪立つ河口平家の五輪塔

さくらんぼ路地の静かな日曜日

武者幟揚げをる人に道を聞き

光子

豆飯を持たせて駅へ次は秋

平成二十九年六月投句

【香椎宮】

楠若葉勅使道なるしやれたカフエ

盛り上がる樟の根涼し勅使道

神域の闇にすつくと今年竹

勝利

竹の皮散りて宿禰の井のひそと

真理子

魚採る刹那の鷺の五月闇

膝を折り水無月に汲む老の水

踏切をわたる緑の勅使道

楠の香の緑陰つづく勅使道

丹の色の柵巡らせて木下闇

節子

棺掛の木に引き返す木下闇

由紀子

宮裏の名水静か蝸牛

草の闇深まるほどに蛍の火

取り置いてくれし実梅をジャムにして

緑陰の井戸に伝へて不老水

光子

古宮へ櫓の花の匂ひけり

平成二十九年七月投句

【野河内】

ジルバ弾け絡むスカート夏館

竹落葉そうめん流しの小屋朽ちて

玉虫の身重のごとく飛び行けり

勝利

父に手を引かれ谷川裸の子

真理子

蟻猛る近くに蹴むかでをり

人影もなき島の山夏の霧

川音に聞き取れぬ声滝近し

溪谷の岩の窪みに水馬

気がつけば金魚に話かけてをり

節子

崩れゆく峰雲に雨気にかかり

由紀子

溪谷の奥へ誘ふか秋の蝶

尾を振つてくるりとそつぽむく金魚

夏霧に立ちて無言や普賢岳

溪谷は八重に折れつつ滝口へ

光子

風涼し身内の息を入れ替へて

平成二十九年八月投句

しほからの影に秋立つ気配あり

戦闘機一直線に峰雲へ

一輪が咲き初めてをり露地の萩

ダンゴ虫のろのろ歩く残暑かな

バス降車ボタンを押して盆の僧

千切れたる翅をさかんに秋の蝶

秋立つやここに出会ひし頃思ふ

戸を閉てて無為なるままに秋暑し

水打ちてついと暖簾をくぐりけり

勝利

書かむとす漢字忘れて秋暑し

山査子のカクテル色の織女星

隈笹のふち色白く秋立ちぬ

虫を食む蜥蜴ひくひく動く腹

野分波出入りの舟のなき港

孫送り届け残暑の家路かな

光子

節子

由紀子

真理子



平成二十九年九月投句

【久留米・クリーク・古墳】

夏草や釣少年の赤帽子

踏み入りし墳墓の蜘蛛が傘に

筑後路や遠山青く彼岸花

勝利

茅干す匂ひ籠りて秋の宮

真理子

瓢箪の小さきを残し日除枯る

うなぎ屋の寄進多かり放生会

秋の陽に竹干してある神の庭

露けしや周濠二重の古墳山

うつそうと古墳の小径草の露

節子

新涼の風に神事の竹を干す

由紀子

花殻をつけた零余子の売られゆく

イヤフォンをはずし花野の風をきく

いつかいつか言ひをる尾瀬の花野かな

霧深き但馬は偲ぶ土地となり

光子

船着き場らしき石段蘆原に

線香に木犀の香の仄かなる

基地の跡なりしコスモス今盛り

残照のほとぼる街に上がる月

勝利

秋野菜美しく添え女シェフ

真理子

秋潮に長き棧橋軋み鳴く

誓文や銀座通りはアーケード

駅員の交わす挨拶秋の暮

ウォーキング一団の過ぎ秋桜

小さな手にしつかり握る木の実かな

節子

からくりの唐子くるりと秋祭

由紀子

店先で夷布売る手芸店

高山の秋や屋台の曳き揃ふ

耳遠くなれど手は利き夷布

宿坊の他に灯の無く身に入みぬ

光子

しばし陽にぬくもる北の刈田かな

平成二十九年十一月投句

【福岡城址・平尾山荘】

凧やオリオン真うへ月ひがし

囚われの身ほとり描き冬ざるゝ

凧は荷馬車の車輪抜けて来し

勝利

貫きし志あり破れ障子

真理子

子供待つ掃除ついでに冬支度

タクシーを降りて小春の坂の道

消防車走る落葉の住宅街

美しき声まだ耳に後の月

鴨の群れ園児の群れに集められ

節子

凧に乾きし魚の鱗の反り

由紀子

冬暖か六畳二間の展示室

吟行の下見の城址薄紅葉

語ること多きは幸と小春の日

虚空蔵は守り本尊小鳥来る

光子

山の木のいつしか庭に小鳥来て

平成二十九年十二月投句

【天丸別荘】

郵便屋さんの赤箱小春の日

五枚活けられし葉蘭や冬座敷

葦原は雀の渋谷交差点

勝利

宿雪駄もみじ落葉を踏んでみる

真理子

落葉積みにつこりと笑む石恵比寿

年長の娘の声高し社会鍋

極月の産婦人科の待ち時間

聖樹なき老舗旅館の太柱

ATM向かひマスクを外しをり

節子

迷路めく渡り廊下や落葉積む

由紀子

箸お椀持参餅つき会場へ

帰りには足早に過ぐ社会鍋

杉玉のあたらし蔵にはやも雪

炭熾し築百年の帳場かな

光子

温泉の宿の離れへつづく冬灯